

槍の勇者と並行世界

ニホニウム

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

(旧題：槍の勇者の成り上がり)

世界の3分の2を犠牲にして世界を救う事を選んだ元康。

お義父さんの為、世界の為。そんな事を思い、この選択を選びました。

…ですが、世界は残酷だったのですぞ。

女神の再来を予測出来ず、敗退していく勇者達。その最中、俺は助からない傷を負っ

てしまいました。… 本当に、この選択が正しかったのでしょうか？

勿論そんな事なんて理解出来るはずが無く、俺はまた世界を繰り返し返す…

それが多少歴史が違う、ifの世界でも。

目次

分岐した世界……？	1
なぜ女が豚に見えないのですかな？	
6	
赤豚は焼かないといけませんな！（使命感）	11
未来から貴方に……	15
ラフタリアお姉さん	19
和解ルートなど目指さない	24
一旦落ち着こうか	28
段ボールですな（ダンボル）	33
災厄の波……？	40
ちよつと嫉妬	44

また、なのか……。	48
番外編 転生したけど、死にそうです	
54	
槍、お前が教えたのですかな？	60
槍の勇者と平行世界	65
槌の勇者	72

分岐した世界…？

「ぐはあああ!」

「元康くん!?」「モトヤスー!」「元康さん!?」「元康!」

——痛みが体を遅います。ゆっくりと目線を反らしてみると、俺の下半身が存在していませんでした。

・・・これは、もう助かりませんな。残念ながら。

「治癒魔法をかけるからまだ諦めないで!練と樹、キールくんは女神の方に対応を!」

お義父さんの声が、薄ぼんやりと耳に響きますが、もうループの心配はありません。なんせ、ここが正規の世界なのですから。・・・はは、俺が馬鹿でしたな。向こうの世界を犠牲にして、別世界とこちらの世界の3分の2を犠牲にしたのにも関わらず、女神の侵攻を阻止出来なかったのですから。

もう、お姉さんも居ませんし、お姉さんの友人も消えてしまいました。絶対に救うと

約束したのにも関わらず。

・・・果たして、約束を破ってまでこの世界を存続させる価値は有ったのでしょうか？俺には分かりませんぞ。

「はは、すみません、お義父さん。もう体力が・・・最後に、俺の体を武器として使って欲しいのですぞ。」

「元康くんが消えるなんて嫌だよ!!それに、もうなにも失わないって、決めればかりなのに・・・」

お義父さんは、優しいですな。でも、もう本当にタイムミットが迫っております。

武器を持つことが規則上許されませんが、体を武器にする事は出来るはずです。それに、俺は貴方に最後まで・・・

いや、いつまでも付き添うと決めたのですからな。

「お義父・・・さん、泣かないで欲しいのです・・・ぞ。これは、俺が決めた未来・・・です。どんな未来になろうとも・・・貴方と、最後まで。だから・・・」

「分かった、分かったよ・・・だから、そんな事言わないで・・・!」

お義父さんの涙が俺の顔にポツポツと降ってきます。しばらくして、決意を決めたのか俺の方を向きほつぺたに軽くキスをされました。すると痛みが少し楽になりました。な。

恐らく、気休め程度の回復魔法をかけて下さったのでしよう。

「……ふ、ふ。これは、どう反応すれば、良いのですか……な？」

「そのままの意味で……って、そんなにやけた顔しないでよ……最後まで、元康くんは……うう。」

瞬間、槍のアイコンがチカチカと点滅をして、消えました。俺はいったいどうなってしまうのですかな。

まったく分かりませんが、お義父さん……いや、尚文さんと一緒に居られるなら、それで良いですぞ。さて、盾の中でゆっくりとでも……したいですな。

「……い、元康くん。——シールド！」

最後に、そんな風に声が聞こえた後、俺の意識は遠く、遠く消えてゆきました。

「……い、おい！元康！……エアストシールド！」

「ぶえろっほおーっ!?ですぞ！」

「ですぞ？それに何故複数形に……まあ、いい。そんな事より俺の膝の上で寝るな！」

「すーはーすーはーですぞ！」

上からお義父さんらしき声が聴こえてきます。ですが、少しお義父さんより高いような……

膝の上……確かに、俺は膝枕された状態で死にましたが、どうして今お義父さんの声が聞こえるのですかな？

もしかすると、これが走馬灯と言う物なのかもしれないですぞ。すーはーすーはー。「キモい！俺の匂いを嗅ごうとするな！ほら、早く降りろ！」

ゴロンつと転がされて膝の上から体が落ちます。仕方ない……と言う感じでお義父さんの方を眺めてみると、とある事に気が付きました。

まさか、お義父さんと思っていた人が、女だったのですぞ。

・ ・ ・
何で女が豚に見えないのですかな？怖いですぞ。

なぜ女が豚に見えないのですかな？

え…？ どうして豚がお義父さんの真似をしているのですかな？

それに、なんで豚の声がちゃんと聞こえるのですかな？ 元康、訳が分かりませんぞ。

「おい、元康。これはどういう事だ。説明しろ… じゃないと——」

「ど、どういう事ですか？ それに、なんで…：…：… 女が俺の名前を…：…」

キリツと恐ろしいような視線が俺に向けられます。

まるで初めの世界のお義父さんのようですね。ですが、これはお義父さんでは無く、豚であるべき存在のはず…：… 匂いもお義父さんの物でしたし、まさか…：…？

「お前のせいだろ！…ふざけるのも程々にしろ！」

キリツとした恐ろしい目付きをしながら、お腹にバルーンをくっつけられました。

俺は昔の事を思いだしながら、このバルーンを引き剥がしますぞ。

すると、お腹にお義父さんの得意技、エアストシールドをお腹に叩き付けられました。
・・・エアストシールド？

いてて、とんとか立ち上がりながら、女を見つめます。

・・・まさか、まさかと思っていた事が信憑性を持って俺に現実を突き付けてきました。
た。

「お義父さん・・・いや、尚文くん？」

「——ツチ。なにをしらばくれてんだよ・・・早く、ここから解放しろー！」

ぞ。
ガアンと俺に攻撃を仕掛けてくる女。盾の為ダメージは有りませんが、心に響きますぞ。

女の腕には盾が。そして、それかコロコロと形を変えている事から伝説の武器だと推測されます。口調からしても、確実にこの人は・・・ワルイドな方のお義父さんでしょう。

ですが、元康には大きな疑問が有りますぞ。

それはどうしてお義父さんが醜い・・・いえ、美人なのですが、女になっているかと言う事ですぞ。

「尚文くん、いえ言いにくいのでお義父さんと言いますが——」
「ふざけるな、ちゃんと話せ。」

怖い、怖いですぞ!?

「・・・お、尚文。俺もどうしてこうなったのか分からないのですぞ。そもそも、どうして尚文が女になっているのかも・・・説明をして貰ってもよろしいですかな？」

「・・・アレの衝撃で、記憶を失ったのか？」

アレの、と言うのは良く分かりませんが、分からないと言うのは本当なので首をブンブンと縦に振ります。

すると、お義父さんは同情の目線をむけながら俺に今に至るまでの状況を説明して貰えました。

まず、この世界は俺が知る世界とは大きく違っていました。

お義父さんが、赤豚に冤罪を掛けられる所までは同じだったのですが、そこから大きく違いました。なんと、あのクスと三勇教が団結してお義父さんに強姦の罪として女性化の呪いを掛けたようですぞ。

「こうすれば、もう我が国民に被害は出ぬだろう・・・」

と。初めの方は、俺と樹、鍊も乗り気でお義父さんに呪いを掛ける事を見ていたようですが、じよじよに本気だと分かるにつれ、やり過ぎだと叫んだようです。

ですが、三勇教とクスはそんな意見にも耳を傾けずに呪いの儀式を成功させてしまったらしいですぞ。

結果、俺たちの仲は悪化。国への不信も連なりメルロマルクから亡命する勇者が増えてしまった。

そして、いつの間にか勇者を使用した泥沼の戦争になってしまったようですな。

まったく、救いようの無い未来ですな。似たような世界線も有りましたが、あの世界より悲惨な事になっているようですから、相当酷い結果になってしまったのでしょうか。

そして、亡命先で戦争に巻き込まれた俺とお義父さんも闘う事になってしまい、最終的には1：1の闘いに。その後の記憶が消えてしまった事から、俺を怪しんでいたようです。

「はあ・・・取り合えず、ここから脱出する方法を考えないとな・・・俺は盾だし・・・」

パシユンとエアストシールドで階段を作り、脱出しようとはしますが高さに届きませ

ん。

ハア・・・と溜め息を付きながら俺の方を羨ましそうに眺めます。視線的に、槍を見ておられるのでしょうか？

そうですね・・・多少強引な方法ですが、これで解決出来るのかもしれない。

「流星槍！」

爆音と共に槍が石壁をぶち抜き、埃が舞いました。ですがこれで道は確保できたので、俺は颯爽と壁の先に足を踏み入れますぞ。

「も、元康、お前いつそんな技を・・・？」

お義父さんが、驚きと畏怖といった表情を俺に向けています。あれ？驚かせてしまいましたか？

余り信用されないと、これからどうなるのか分かりませんぞ。これから先、本当に上手くやれるのですかな？元康、心配ですぞ・・・

赤豚は焼かないといけませんな！（使命感）

「ブヒブヒフビ・・・？」

多少豪華な格好をした赤豚が俺の下へ駆け寄って来ましたぞ。なにやら、俺を見てブヒビヒと汚い声を発しています。・・・あの赤豚、どこかで見たことが有るような。

「ブヒーブーのです——ブヒブ・・・かった——!!」

ん？赤豚の言葉が所々聞こえるようになって来ましたぞ？・・・まさか、この症状が治りはじめているというのでしょうか？・・・便利には成りますが、なんか嫌ですな。

しかし、所々にしか聞こえないので判断は難しい——よし、お義父さんに聞く事にしましょうか。

「——チツ。騙っていたのかよ、元康。お前本当にクズだな・・・！」

お義父さんの盾からカーススキルと思われる力が高まっています。

——不味い、誤解だけはされたく無い。

カーススキルはこの槍で傷も無く防げる事が出来ますが、一度失った信頼関係の修復

は絶望的ですぞ。あの言葉からして、俺の事を多少信じていて貰えたのでしようし。

俺は、きつき思い付いた行動を実行しますぞ。・・・お願いだから、収まって下さい。

「尚文、あの赤豚がなんと言っているか翻訳して貰えないですかな？」

「・・・は？赤豚・・・マインの事か？それに、なんで翻訳なんだ？」

良かったです・・・ぞ。お義父さんの体からすつとカースが退いていきました。

あつけにとらせる作戦は成功しましたが、これからどう説明をするのですかな・・・？

元康、いつさい考えておりませんでした・・・。とりあえず、流れに身を任せる事にしましょう。

「えっと・・・俺は、未来から来たのですぞ。だから強力な武器を持っていたり、未来の事を知っていたりはしたのですが・・・余りにも世界が違ったので、状況を把握するのに時間が掛かってしまったのですぞ。」

「未来から・・・？嘘だ。そうやってまた俺を騙す気だな。どうせマインがここに来たら——」

・・・何処かで見ることが有ると思えば、あいつ、マインだったのですか。

・・・にしても、赤豚の声が聞こえるとか・・・ウエエ、バツチいですぞ！汚物は消

毒をしないといけません!!

「なら、あの赤豚・・・マインを殺してやりましょうかな? お・・・尚文の念も、少しは晴れる事でしょうし。」

「ふくん、そこまで言うのなら、やってみる。アイツを殺せば少しくらい信用してやっても構わないぞ。ただ、お前には絶対出来ない——」

「バーストランスXでくすぞ!」

出来ない・・・何ですか? まさか、お義父さんは俺が汚物を消毒出来ないとても? ハハ、ご冗談を。例え俺が仲間思いであろうと、ただの女好きであろうと、お義父さんを陥れる者には容赦はしない! ですぞ。

「ブーついい助け——イイイ!?!」

「はは、どうですか? 折角だから、威力を落としてしっかりと焼いて上げましたぞ?」

「・・・・・・・・・・。シールドプリズン!!」

あれ? 何も見えませんか? お義父さん、お義父さん? いったいどこですか——

14 赤豚は焼かないといけませんな！（使命感）

？

未来から貴方に…

「お義父さ〜ん、待つてくださ〜い♪」

元康、全速力でお義父さんを追いかけますぞ。勿論これは演技で、俺を可笑しな…人格が狂った人だと思わせる事である程度友好的に過ごして貰おうと言う計画だったですが… 失敗してしまっただようですぞ。失敗、失敗。

「来るな、来るなあああアツ!!」

大丈夫ですぞ！赤豚はもう殺害しましたからな、もうここには来ないはずですよ！

…まさか、これ、俺に言っておられるのですかな？

H A H A H A H A。まさか、お義父さんにはある程度の好印象を与えて来たはずなので、嫌われる余地なんてありませんぞ。

もし嫌われたとしても、それはあの赤豚のせいですよ！

あの赤豚が俺に近付いてくるから、お義父さんによけいな誤解を…やはり、早めに処分しておいて正解でしたな。

「ハア、ハア…!?まだ着いて来て…！」

そう言えば、この辺りに嚴重な結果が施されていて、なかなか通路の先にたどり着け

ませんな。

ここは前回のループの砂漠の迷宮のような場所なのでしょいか？

「おりや！ですぞー！」

パチンツと時空が歪んでいる場所にブリューナクを撃ち込みます。

その反動で浮き上がったお義父さんをキャッチしますぞ。キャーッチ！成功ですぞ。

あれ？お義父さんの顔色が優れませんな。もしかして、酔ってしまったのかもしれないですな。

けれども、お義父さんは酔いに強いはず？なら、別の事？ですかな？

「……色々と突っ込みたいたんだが、取り敢えず……離せ！」

ゴンツと鈍い音が俺に響きました。ツーツンと淡い痛みが体に走ります。

「……尚文、そこは殴ってはいけない場所ですぞ？」

「知ってる！てかお前が離さないからしたんだろ！俺もこんな事やりたくなかったわ！」

どうやら、股間に金的をくらってしまったようですな…… 勿論強化しているので痛みは差ほど有りませんが……

元康の元康が変な性癖に目覚めてしまいそうなので、出来れば辞めて欲しいですぞ！『お前の性癖など知らんわ!!』……あれ？何故か最初の世界のお義父さんの声が聞こえ

た気がしますな。H A H A H A。まあ、きつと気のせいでしょうがな。

「うええ……リアルにアレの感触があ……手を洗いたい……」

アレ……？アレの感触と何ですか？元康、まったく分かりませんが。そうですね、聞いてみる事にしましょうか。

きつと優しいお義父さんならなんやかんや言っても答えてくれるはずでしょうから。

「尚文、質問が有りますぞ。」

「……ふざけた事を言うなら、殺すぞ？」

——ゾクリ。辺りに冷たい空気が漂い始めます。恐らく演出などでは無く本当にお義父さんからカースが出ているか、亡霊でも迷宮にさまよっているのでしょうか。チツ。赤豚の亡霊を殺しきれなかったのですかな？

よし、この話し合いが終わったら赤豚にもう一度ブリューナクを撃ち込む事にしましょう。まあ、赤豚の亡霊など怖くないので俺は平然としながら口を開きますぞ。

「——アレの感触とはなんですか？」

「……殺す。」

「ちよ、ちよつと待つて欲しいのですぞお!?お、落ち着いて、落ち着いて……ドウドウ。」
「フィロリアル扱いするな……てか、本気でふざけた事しかしないなら俺はお前を信じない。」

「ふ、ふざけた事とは何ですか？俺は真剣に——」

「じゃあ！アレは何だ！アイツを殺したあげく、俺にセクハラまでして... お前はいい、何がしたいんだ...？」

H A H A H A H A。何がしたいか？勿論、フィーロさんと会いたいですぞ！...でも、この世界では会うことは難しいのでしょうか。なら、こう答えましょうか。俺が何度もお義父さんに言っつて来た言葉を、今回も。

いえ... 何度も、何度でも貴方に言うであろう言葉を。

「未来からあなたに恩を返しに来ました... お義父さん。」

ラフタリアお姉さん

「・・・やりチンの頭は股間に有ると何処かの情報で聞いた事が有ったが・・・さっきの
で更に狂ったか？」

「やりチン？ H A H A H A . . . (ご冗談を。)」

ちよと心辺りがあり過ぎたせいで声が震え気味になつてしまいましたぞ。
うえっ・・・あんな黒歴史、早く忘れてしまいたいですな。

黒歴史、昔フイーロたんによつて真の愛に目覚めるまでは豚の尻ばかりを追いかけて
いた自分が居ました。

・・・そんな豚に騙され、お義父さんを傷つけてしまった。俺がお義父さんに負い目
を感じ、ループを繰り返す一つの理由でも有る・・・なんて昔の俺は馬鹿だったんでしょ
うか。

「自覚は有ったのかよ・・・」

あり過ぎて怖い！ですぞ。

「・・・それで、お前は俺に何を要求するんだ？」

おっと、これは俺の事を信じて下さるのですかな？

しかし、なにが欲しい・・・ですか。その答えは勿論。

「お義父さんが欲しいですぞ！」

「死ね。」

即答、即答ですかな!?!しかしお義父さん、少しずつですが死ねのスピードが上がって
いませんか？

最終的には本当にカーススキルで殺しにかかってきそう怖いですな・・・

「仲間になりたいと言う意味で、ですぞ。別に変な意味で言った訳では有りませんから
な・・・?」

「冗談だ。てかこれで変な意味だったなら、お前のストライクゾーンどれだけ広いん
だって話しだよ・・・」

確か男の娘とヤツタ事が有るくらい昔の俺のストライクゾーンは広がったはずす

からな。案外今でもそうなのかもしれないですが・・・俺の愛は基本的にフィードバックの物ですからな。

後、片手に花を持つ事くらいは出来ませうぞ!!

「・・・分かった。お前の事を信用する。但し、条件としてお前が知っている有益な情報を全て言え」

ただでは決して転ばない、さっすがお義父さんですぞ!!そこにしびれる憧れる!ですな。

.....

.....

...

「俺が、宗教上の敵・・・そんな、理由で?」

「はいですぞ。メルロマルクの国民の大半は三勇教と言う害悪でしか無い宗教を信仰しているの・・・お姉さんが暮らして居た町の宗教は違うようですが・・・」

「さて、お姉さんって誰の事なんだ・・・?」

お義父さんが俺に問い詰めるように聞いてきます。

恐らく、仲間が手に入るかもしれないと思っておられるのでしよう。仲間と言うよりは、奴隷なのですが……

絆と言う面では仲間と言えるかも知れませんが。

「ラフタリアお姉さんの事ですな、お義父さんの奴隷でお義父さんに対し、淡い恋心を抱いていたと聞きます。こちらの世界でどう生きているのかは分かりませんが……」
「そう……か。済まない、話しを止めてしまつて……」

別に大丈夫ですぞー。と軽く答えて置きました。

にしても、今回のお義父さんは仲間と言う言葉に執着している気がしますな。気休めの言葉でも掛けておきますか。

「お義父さん。心配しなくとも、俺はいつでも貴方の味方ですぞ?」

「……心配なんて、して無いよ」

お義父さんが、悲しそうな顔をしながらポツリと呟きました……。何か過去に有つたのかも知れません。それを打ち消すように、お義父さんは言いました。

「元康、話を続けろ」

「分かりましたぞ。では、続きを……………」

和解ルートなど目指さない

——と、俺はほぼ全てをお義父さんに話しました。

勿論、過去の俺のアレは抜いてですが。

それと、クズに怒りが向かうように多少話しを盛ったり・・・赤豚の事について（以外略）しましたが、まあそれは語り手によつて多少物語は変化してしまう物ですからな。仕方ない、仕方ない。

話し終えた後、お義父さんは世界に、全てに失望したのか（と言うか、させた）ハア・・・っと、一度ため息をつけて俺に話しかけてきました。やりましたな、これでお義父さんの中の俺への好感度が多少上がった事でしょう!!

「・・・この世界がクズでどうしようも無いことは嫌でも理解した。本当なら今すぐにでもクズとビッチ・・・」

多少の間を置いてお義父さんは会話を再開しました。

「・・・はたった今、目の前に居る奴が殺した件について」

「俺が殺処分してやりましたからな！心配は要らないですよ！」

「いや心配しかねえよ!?!そもそもあいつ物語のキー的な存在だったんだろ・・・?殺して大丈夫だったのか?」

確かに赤豚は色々と重要な存在だったはずですが・・・今回はクズとの和解ルートを目指している訳では無いので、きつと大丈夫でしょう。きつと・・・

「後悔するなら殺すなよ・・・あれか、つい手がでてしまったって奴か・・・?DV夫みたいなの」

「赤豚の夫なんてごめんですぞ・・・」

「まあ、それは俺も同意だが。」

閑話休題ですぞ。

こんな感じで雑談や猥談を繰り返しながら、俺達はこの・・・牢獄と言うよりかは迷宮のように長い通路や別れ道を探索しました。

途中道を壊して脱出しようと思いましたが、通路が崩落してはいけないとお義父さんに止められてしまいました。

しづしづ通路を歩いていると、行き止まりだと思っていた場所に七色に光る変な扉を見つけましたぞ。

妙なアーチ状に形が作られており、こう・・・混ざりかけの色をしたシャボン玉の膜のようなものが波打っています。

「なんか、別の場所に移動するオブジェみたいだな」

「そうですね、俺の世界のゲームでも似たような扉がありましたぞ」

お義父さんはやっぱゲームはどの世界でも同じなのか、と納得したように頷いた後、扉の前で少し戸惑っておられました。この先に何が有るのか分からないので用心しておられるのでしょうか。

事実、俺の敵感知には妨害がかかったように雲って何も反応していないので、お義父さんの読みは正しいです。

まるで、ここの世界と向こうは違うみたいですね・・・

「心配なのでしたら、俺が先に言って確認してきましょうか？」

「・・・いや、片道切符の扉なのかもしれない。一緒に行った方が危険は少ないだろ」

確かにそうかも知れませんが、と言ってお義父さんに手を差し伸べます。すると、違う

そうじゃ無いと手を弾かれてしまいました．．．ですがこの元康、お義父さんの事を思い無理矢理にでも手を繋ぎます。

最初こそ抵抗していましたが、訳を説明するとしぶしぶ手を繋いで下さいました。女体化しても男らしい手．．．と言う訳では無く、小さな手でした．．．

「何じつとしてるんだか．．．入るぞ？」

「はい、ですぞ！」

お義父さんの事にためらっていると、お義父さんが強引に繋いでいる手を引つ張つてきました。

まったく予想していなかった事なので扉に倒れる形になり、俺の手を繋いでいたお義父さんも倒れこんでしまい——俺の顔に痛みが走る．．．事は無く、代わりにざらざらとした感触が。

「な——!？」

ムクリと立ち上がり、景色を眺めた時、俺達は絶句してしまいました．．．

俺の先に見えた物は、先程までの迷宮と違い．．．青い空、暑苦しい照りつける太陽、白い浜、そして海．．．。

迷宮内とは思えない光景が広がっていたのですぞ。

一旦落ち着こうか

「お義理父さん、どうやら道を間違えたようすな」

「いや、ここしか道無かつたろ・・・？」

訳が分かりません。どうして迷宮内に自然が有るのですかな？道を間違えたのか、空間移転が行われたのか・・・

空間移転ならまだ良いのですが、さつきから同じような空間を回っているような気がするので、空間が入り混じっていてその間を移動した可能性も有りますぞ。

そうだとすれば本当にこの空間は迷宮すな。魔物も勿論いるかもしれませんし。

ん？お義父さんからフイー口たんの匂いがしますぞ！

「ゼーはーゼーはーですぞおおおー！」

「キモツ!?俺に抱きつくな！離れろ、ほら・・・! (殴)」

はあ、はあ、とりあえず一旦落ち着く為に情報を整理しましょう。

俺の名前は北村元康。現代では豚達といちゃこらしていましたが、最終的には豚に刺されて命を落とすはずでしたが・・・気が付くとゲームキャラクターである槍の勇者として異世界に召喚されていたのですぞ。（他に、剣、弓、盾が有る）なんでも、世界を滅ぼす『波』という災害から世界を救って欲しいとの事でした。

夢のような状況に胸を踊らせていた俺達ですが、召喚から数日後の事、とある事件が起こります。と言っても冤罪なのですがこの時の俺は愚かにもメルロマロクと赤豚の策略に嵌まってしまいお義父さんを罵倒してしまいました。

これが、俺のループを繰り返す原因の一つになりますぞ。（後はフィーロたん愛）

赤豚に裏切られ、真実の愛（フィロリアル狂）に目覚めた俺は、ずっとその事を後悔しております・・・。

そして、ついにその後悔を胸に抱えながら俺は奴に倒されてしまったのですぞ。本来なら、そこで俺は死に、ENDだったはずですが、何故か俺は過去に戻っております。この槍、龍刻の槍で・・・。

過去に戻ると言う最高の機会を得た俺は、赤豚の策略を公開する事に成功し、遂に：

！

.....

.....

...

「未来から、貴方に恩を返しに来ました。お義父さん」

「・・・え？」

...

.....

.....

お義父さんを救う事に、成功しましたぞ。

これが、俺が経験した一度目のループでしたぞ。そして俺は何度ものループを繰り返して、繰り返し、そしてまたループをする・・・はずだったのですが、目覚めると何故か牢獄。

そしてここがポータルスピアが使用不可な異世界のような空間・・・つまる所、迷宮だと言う事が判明して、今に至ります。

「何余韻に浸っているんだか・・・」

「お義父さん！」

「うわ！急に話しかけるなよ．．．で、どうするんだ？」

「何が有っても俺がお義父さんを守りますからな！」

お義父さんがこうして危険な目に合ってしまったのは昔の俺のせいですぞ。もし、お義父さんが「責任を取れ」と命ずるなら、俺はどんな命令でも聞くでしょう。

ですが、その事を自負するより前に俺にはお義父さんを守ると言う責務が有ります。ですから、この元康、身を削ってでも貴方をお守りしますぞ。勿論、どんな事が有ろうとも．．．

「この先どうするかって話だよ．．．なんでお前はそう話を大きくするのか．．．？」

成る程、そう言うお話でしたか。ならば、あの先の草原に向かつてこの迷宮．．．空間から脱出する方法を探した方が良いでしょう。

え？立ち直りが早い．．．ですか？

なら、フイーロたんが良くしていた事でも真似をしてみましよう。

「ぶー．．．」

「何その反応？」

「フイーロさんの真似ですぞー！」

すると、お義父さんはツツコミが追いつかないと唸っておりまして。
いったい何にツツコミを入れたかったのでしょうか・・・？

段ボールですな（ダンボル）

——その後、俺達は草原の方向に向かう事にしました。

と言つても、俺のレベルなら何処にでも行けたでしょうがな!!

「見慣れない生き物が結構居るな．．．あそこに居る段ボールに似た奴とか」

ガサゴソと茂みの中から出てきた魔物がお義父さんに襲いかかります。お義父さんはそれを手で捕まえて観察しております。えっと、名前は．．．

ホワイトダンボル

見慣れない魔物ですな。（二度目）形は四角形の．．．白い、段ボール箱ですか？お義父さんに精一杯口を広げて噛み付いておりますが、お義父さんにその程度の攻撃はつきません。

しかし身に覚えの無い魔物ですが．．．何故か顔と下半身が疼きます。何処かで似た

ような魔物が・・・

「バルーンみたいな魔物だな。元康、何処かでこんな魔物見たことがあるか？」

なる程、バルーンでしたか。顔と下半身が疼くのも納得ですな。お義父さんも思うところがあるのか、ニヤニヤと笑って訪ねて来ます。

「初めて見る魔物ですな。バルーンに似ていてなんか嫌ですぞ・・・」

そう答えるとお義父さんは面白い物を見たとはばかりに笑いました。俺も真似した方が良いのでしょうか？

HAHAHA。するとお義父さんは不機嫌そうに言いました。・・・？何故でしょうか？

「とりあえずザコだし武器に入れるか」

「はーい、ですぞ！」

槍の先をホワイトダンボル・・・面倒なので段ボールと呼ぶ事にしましょう。段ボールに槍を当てるとボスツと音をたてて折りたたまれたような形で目をX字にして動かなくなりました。変な生き物ですな。え？ファイロリアルも変？・・・お前みたいな勘のいいガキは嫌いですぞ！

EXP0獲得。

経験値阻害が働いて経験値が取得出来ませんでした。

これは果たして獲得しているのか・・・？なんて疑問はありますが、そもそも勇者二人が揃っている事がバグのような物なので仕方がないですぞ。

「豆腐みたいにあっけらかんと終わったな・・・」

「こんなの先に触れるだけで倒せますぞ！」

「まあ、お前の力じやな」

強くてニューゲーム状態ですから、殆どの魔物に苦戦する事は無いはずですよ。

と、そんな事を考えているとお義父さんが段ボールを盾に吸わせました。俺も近くの段ボールを狩り、吸わせてみますぞ。

初心者用の白い槍の条件が解放されました！

初心者用の槍

能力見解放・・・装備ボーナス 攻撃力二

うん、弱いですな。バルーンと同じと見ても良いでしょう。攻撃力が弱いのも、全く同じですな。

「もつと奥に行けば強い魔物に会えるかもな」

「ファイロリアル様とも会えるかもしれないですしな！」

そんな当初の目的とは若干離れた事を考えながら、俺達は草原を歩きました。

探索の途中にお義父さんは色々な盾を解放しておられました。元の世界の能力に似た盾が多いそうです。

探索している内に気付いたのですが、この迷宮の魔物はカタカタの名前を持つ種類があまり居ないようです。

ウサピルに似た魔物が、頭身兎とかそんな感じですか。

「喉が渴いてきたな・・・」

「少し先に川のせせらぎが聞こえますぞ」

どうやらこの迷宮、川もあるようですぞ。

・・・よく考えれば、海があるので、川もそりやありますな。ちようど喉が俺も渴いてきたので、行くのも悪い手では無いのかもしれないぞ。

せせらぎを頼りに歩いていくと、川辺にたどり着きました。少し離れた所に木で作られた橋が掛かっておりますな。生水を手ですくい、ごくごくと飲みます。

「ふう・・・」

お義父さんは水を飲み人心地付いたのか声をあげます。

美人な女の子（TS）が川の水を飲んでる。昔の俺なら憧れたシユチュエーションなのでしようが、今の俺には分かりません・・・そんな他愛ない事を考えていると、川からサブツと水飛沫をあげて魔物が姿を表しました。

「河童・・・ですか？」

そこには、緑色のカエルのような姿をした河童らしき魔物が数匹居ました。頭に皿を載せて、甲羅を背負っている。まんま河童の姿ですぞ。そう言えば、昔豚と都市伝説を探って河童を探している時期がありましたな。

「クア！」

俺達に敵意が有るようで、攻撃を仕掛けてきます。これは、殺しても構いませんな？

「ブリューナクX！」

お義父さんの方向に熱が届かないように工夫をしてブリューナクを最大出力で打ちます。水分を失った河童達はボロボロと崩れていき、消滅しました。

H A H A H A、俺に関わった事がお前の死因なのですぞ！

「え？何々!?!川の水が蒸発したんだけど！え、何で!?!ああ、オレのルアーが!?!」

と、そんな時でした。聞き覚えの無い声が聞こえたのは……。いったい誰ですかな？

まあ、お義父さんに危害を加えるなら誰であつても河童のように蒸発させてやりませうがな！

災厄の波・・・？

「・・・元康、お前いったい何をしたんだ？」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・つとお義父さんから音が聞こえてきそうなくらいに、ワイルドな笑顔を俺に向けて来ました。まるで俺が悪い事をしたように見えますが、俺はブリューナクを使っただけで・・・ブリューナクXを・・・。

ですが、そのブリューナクを使ったのは誰なのですか・・・？

善意でした事とはいえ、結果として今俺はお義父さんに迷惑をかけてしまっているのではないのですか？

このせいで、お義父さんから嫌われてしまうのではないのですか？俺は、要らなかつたのではないのか？

「結局、お前のせいじゃないか・・・はあ。」

俺は、俺は・・・また、俺のせいで・・・？

俺は、またお義父さんに、尚文くんに迷惑を……。さつき、守るって約束したばかり……。なのに、また、またなのですか？

俺は、要らない？また、嫌われてしまう。あの時と同じように？

きつと優しいから、そんな事にはならないはず。ですが、そんな事をふと思つてしまいました。

そんな感じで俺がうじうじしている内にお義父さんと豚……。彼女は和解したようで、共に自己紹介に入っています。

和解の条件としてお義父さんがルアーを作ると約束すると彼女はそれに飛びつき、機嫌を直してくれました。流石豚、立ち直りが早いですな。

それは俺もですがな。そして、驚く事も発見しました。それは、彼女が……。

「オレの名前は風山絆。四聖、狩猟具の勇者さ」

「……は？」

俺達を知る世界とは別の世界の四聖だったと言う事ですぞ。そして、赤豚の悪行も発覚しましたな。

「空から落ちてきたのを保護して運んだんだけど・・・」

「・・・え？牢屋に鍵がかかっていたんだが・・・」

「鍵は閉めて無かったんだけどなあ・・・可笑しいなあ」

「・・・赤豚ですぞ。奴が鍵を閉めて自作自演をする気だったに違いありません！（キツパリ）」

「え？赤豚って？いったい誰の事？」

「俺達以外に保護した奴は居なかったか？そいっただよ」

「・・・？」

そんな時、絆は言葉を濁し訳が分からない、と言ったように話そうとしました・・・その時。

バキンッ！！

大きな音が、この空間に響きました。

さつきまで青く、美しかった空は赤黒く染まり、ビキビキ亀裂を生じさせながら割れていきます。

それは、まるで災厄の波のようで・・・。

あの時と、尚文くんと戦った時と似ていて。

「——ハアツ!?」「えっ?」

何が起きたのか、しばらく判断出来ませんでした。

ちよつと嫉妬

「なんで急に波が・・・」

「波？波つてあの異世界で起こるとか言われてる伝承のやつ？」

真つ赤にそまりゆく空を眺めながら絆がほつりと眩く。

災厄の波、あの時、アイツと不利な決闘を挑まれた時にソレは似ていて。

「波に参加したことが無いのか・・・？」

「だから、この空間じゃ外界と隔離されているからオレにもよく分からないだつて！」

絆が鬱陶しそうに答える。俺はおもむろに元の世界で動き始めていたはずの時計のアイコンを呼び出した。

――：――

すると、残り時間の表示が消えていた。まさか、ここの空間では本来、波が起こる事

が無かったのか・・・？

何か前回のループで無かったのか、と元康に問いたただいたが元康も今回のような事は初めてだと言う。

この空間の事を話さないので一時期元康の事を疑っていたが、表情からして嘘だとは思えなかった。

まあ、その表情も嘘だという可能性も棄てきれないが、わざわざ俺の味方につく振りをする意味が無いだろうし、マインをためらいもなく殺した事も普通に考えて可笑しい。

だが、深く信用はしない。元康も何かがあり、俺に協力しているのだろう。例えば、ここから脱出したいとか。

もしアイツが何も考えずに行動しているならば、ただの馬鹿だしな。いや、ただの馬鹿なのかも知れないが。

「とりあえずオレは周辺の魔物を片付けておくから、尚文達は中心部を抑えて！」

そう言い、波から溢れ出る魔物に攻撃を仕掛ける絆。

「……あれ、俺よりも攻撃力高いんじゃないか？」

近心感が湧いていた分、ちよつと嫉妬心が疼く。

「な、なあ、俺には攻撃力が全くないから、絆が前線に行った方が良くないか？」

「波は中から人が出てくる事があるって聞いた事がある。オレの武器は狩猟……対人の能力が無い。尚文と似たような事で人を傷つける事が出来ないんだ……」

えっ……？つまり、絆の武器は人と戦うことが出来ない制限がある…….と？絆に合ったとき、何か親近感を感じたけど、まさかコイツも……？

「だから捕まりそうになっても戦えなかつたんだし、多数で逃げる事も出来なかつた……」

絆も同類なのか、どうやらこの場所でも勇者は迫害される運命らしい。けつきよく何処も似たような物だな。

元康は、同類なのか……？自業自得で、落ちぶれたコイツが……？

ふと元康の方向に振り向こうとしたその時。

「……!? お義父さん! 絆、危ないですぞ! しゃがんで下さい——!」

「あ、え!? わ、分かった……」

「流星槍——!!」

ズドーンつと、広範囲に星らしき物が降り注ぐ。そんな中、煙の中から何かが見えて……。

「力式爆発」

光の刃が流星槍とぶつかり合い、消滅した。ズシーンと大きな衝撃波が俺の周囲を襲う。

「……は、思ったよりやるじゃねえか」

ちやうど元康と対立する姿で、本の人を表れた……。

また、なのか・・・。

突然、災厄の波が起きたと思えば、中から人が数人出てきた・・・。

まさかと思いい咄嗟に流星槍を展開。ですが、どうやら女神はいないようですぞ。

良かった。ほっと、心の中で安堵した。

それが表情に出てしまったのでしょうか、敵・・・本を持った何処か見たことのあるような雰囲気・・・タクト二号と名付けましょうか。

「はっ、槍の勇者！わざわざ遠い場所から空間移転してやってまで殺しにきてやったんだぜ！感謝しろよな」

タクト二号にいちやもんを付けられました。コイツ、本当にタクトと似ていてウザイですな。

・・・死ねばいいのに。無駄な戦闘は避けたいですからな、殺気を出して威嚇しましょう。

これもお義父さんに教えてもらった方法ですぞ！

「ひいっ……」

周囲の獣人？達は随分と威嚇だけで大人しくなりましたな。所詮声が聞こえるようになつたとしても、豚は豚。

勿論、お義父さんは性別が変わろうとも俺の中では変わりませんが。何があろうとも着いていきますぞー！

「……ふ、雑魚とは言え流石勇者サマ……か。だが、そんなヤワな攻撃が俺の女に聞くと思ふなよ！」

……俺の女、ですか。不意に昔を思い出す。

ナイフに刺され、苦しみながら死を覚悟した時、そして女神に貫かれ、大切な人の前で死んでしまった時。そして、大切な人を救う事が出来なかつた周回。

……それは、全てのループでなのかも知れませんが。

……どうして、コイツはこんなに自己中なのでしょう。怒り、訳の分からない、自分自身へ向けられた怒りなのかもしれない。

「お前は、誰ですか？俺は北村元康ですぞ」

だから、全部、全部。コイツに向けてしまおう。

今回だけじゃない、タクトのように何度も何度も。

いくばくものループの世界で。

ソノナマエヲ、ノウリニヤキシケテヤル。

「・・・!?いいいだろう！そっちの方が面白い！」

・・・っと、流石にやり過ぎましたかな。俺の方がカースに呑み込まれそうでしたぞ。一方タクト二号の方は・・・少しオーバーリアクション過ぎませんか？

「俺の名前は、キョウウⅡエス二ナだ！冥土の土産にでも覚えておけ・・・」

キョウウⅡエス二ナ。

その名前、確かに脳に焼き付けましたぞ。お義父さんに向かって攻撃をしかけた恨

み。

楽に死ぬると思うなですぞ？

「——第八章・天罰！」

グラリ、と空間が歪み空から雷が降ってきますぞ。

ふ、この程度俺にとっては雑魚の攻撃ですな。

そう思い、俺はいつも通りスキルを放とうと……。

「えっ……?！」

雷が俺に当たる瞬間、進路を変更。

多数の雷が、お義父さんの方向へと向かった。

何故？まさか、コイツは最初からソレを狙って……？

『我、愛の狩人が天に命じ、地に命じ、理を切除し、繋げ、膿を吐き出させよう。龍脈の力よ、我が魔力と勇者の力と共に力を成せ。力の根源たる愛の狩人が命ずる。森羅万象

を今一度読み解き、お義父さん達を守る炎の壁を成せ！』
「ファイアーウォールV！」

咄嗟の判断で、ファイアーウォールを唱えました……。

……

……

……

……ダメ、間に合わない。

なんで、どうして。分かっていたはずなのに。

俺が自分の保身ばかり考えていたから。

また、守レナイノか……？

また、ループを言い訳ニシテ嫌な現実から逃げるノか？

……

……

・
・
・

時が、ゆつくりと流れる……。

それは、ループをするときの感覚に似ていて。

「……また、なのか……今回も、守れなかった……」

また、なのですか……？

番外編 転生したけど、死にそうです

気が付くと、私は質素な石造りの部屋にいた。

こ、ここは、いったい……？

自体が飲み込めずに、ヨロヨロとその石造りの部屋を歩く。ギィ……と小さな音がした後に、ガチャン、と何かが閉まる音がした。

恐らく、石造りの部屋の扉。

何かで挟んで止めていたような跡があったけど、それが取れてしまったのかもしれない。

私以外に人もいなかったし、大丈夫だろう。

トコトコ、トコトコとゆつくり歩いていっている内に、私の過去……？を思い出した。

確か、現代社会でOLをしていたはず。

で、確か久しぶりに図書館に出掛けてそれで……あ、そうだ、私死んだんだ。

それも、確実に転生案件のトラックに引かれて。

いや、引かれたと言うよりかは跳ね飛ばされた、と言った表現の方が正しいのかもしれない。

めっちゃ痛いんだぞ、アレ。

まあ、結論だけを言うと私は転生、もしくは転移をした可能性が非常に高い。

トラックとかもう転生しか思い浮かばないよね。

うん。別に私がラノベ脳とかコジマに汚染されている訳ではないよ？

ただつい最近放送されていた「盾の勇者の成り上がり」を観ていた……他にも、原作のWEB小説を漁ったり、オススメや他にも人気の作品を漁ったりしたけど、多分汚染はされていないと思う。

で、そんな感じに廊下？にしては長い場所を通り、扉を発見。虹色に輝いてるけど、何かアレ見覚えが有るような、無いような。

ほら、別にゲームであんなの有ったような……。

あ、あれ絶対転移とかで跳ぶ門だわ。

……

閑話休題。

取り合えず、アノ扉は後で潜るとして、ソレより優先する事が私には有る。

顔を確認する事である。このままではいったい誰なのかが分からない。

もしかすると、有名な小説の主人公かもしれないし。

いや、こんな長い廊下を通るシーンが書かれた小説なんて見たことが無いけどね。

でも、自分の顔くらい知っておいても構わないだろう？

凄く気になるしね。変わってなかつたら変わってなかつたで……。

それはそれで……後で考える……。

おっと、そんな事を考えている内に洗面所らしき場所にたどり着いた。あら？正直
言つてそこまでこの石造りの建物に有るとは期待していなかつたのだけども。

例えば言うなら、レアガチャガチャ単体でSRが出た感じ。運は余り良くないのだけ
どな、私。

ふふ、これは時代が私に追い付いたか？……なんて馬鹿な事を考えながら私は鏡
を覗いた。

「……はえ!？」

するとそこにあつたのは、勿論見覚えのある私の顔ではなくて……うん。この顔は間違いなくアレだ。ヴィッチと呼ばれる、悪役にして全ての元凶のアイツだ。

「うそ、マインなのお!?何で、何でえ!？」

なんど頬をつねつても効果無し。ただここにいる私ことマインが、『盾の勇者の成り上がり』と『槍の勇者のやり直し』において敵として登場する愚かで極悪な王女（元）であることに間違いは無い。

盾の勇者の成り上がり。

小説家になろうと言うWEBサイトで投稿されたのを皮切りに書籍化し、ついにはアニメ化までした作品。二次創作活動も盛んで、私も連載していた。

……あんまり人気は出なかったけど。

あらずじは、図書館に本を読みにー「もう言いましたぞ」

ああ、そうですかなら説明は必要無いですね。

なら槍の勇者のやり直しの事でも……ええ!？」

……だ、誰なの!？」

「愛の狩人、北村元康ですぞ」

あ、そうそう。この人が北村元康。

『槍の勇者のやり直し』では主人公を演じているキャラクターで、マインの事を『赤豚』とか言ってる人。

基本的に女の声は豚の泣き声にしか聞こえないらしいし、隙あらば殺しに来る。

そう、それは今現在の私にも当て嵌まる。

だって、私は憑依とは言えマインなんだから。

突然後ろから槍で突き刺されて死亡…… とか有り得る。

フハハハハハ。BADENDですぞー！なんて展開も……

だから、槍次元だけは嫌だと言おうと思っただけなのに。

ーなんて、どうして!!

「さて、赤豚。全部話して貰いますぞ……？」

「元康、殺すなよ？」

どうしてまだ完結もしていない作品に私を憑依させるのよあのクソ女神は!!
しかも何度聞いても口調的に槍だしーーーーー!!

気がつくくと、クタクタと私はゆっくり地面に横たわっていた。
ハハハ。もう疲れたな。

あ、そういえばなんで槍元康が私の声を聞いているのだから。
もしかして先の展開の話?

それと隣にいる尚文を美少女化させた見たいな人は誰? TS?
TS尚文なの・・・? いやそんな事は有り得るはずが……………
なんて、ちよつとした考察しか出来なかった。

…
…
… 現実逃避やめよう。

……………
…………… フハハ。私の人生、どうなっちゃうの……………?

槍、お前が教えたのですかな？

・・・今度こそは貴方を守る。

上手く立ち回って、危険を先回りして潰して。

お義父さんを、守ってみせる。

そう強く、強く願いました。

例え女神に勝つ力が無くとも、俺は貴方を守る。

ですが、出来れば今回のループでそれも終わりにしたい。もう、貴方の悲しむ顔を見たくはないのですぞ。

槍がカタカタと震え始める。

視界に、アナログの時計が出現してー

ドサツと壁に当たったかのような感触を覚え、同時に長針が逆方向に戻るのをやめてしまいました・・・。

「え？」

・・・・・・？

何故、時が戻らないのでしょうか。

俺はおもむろにそのアナログ時計に腕を伸ばし、何度か触ったり揺らしたり、時間を
変えたりしてみます。

・・・。

・・・。

・・・。

何も起こりませんぞ・・・？

今更ながらに、俺は焦り始めました。

何故、時が、戻らない。

壊れたのか？

「・・・おい！この時計、壊れてますぞー！！」

当たり前ですが、返事がありません。

「・・・まあ、そりゃ返事などありませんな」

空を眺めてみると、そこは真つ暗な空間では無く夜のように、星が輝いていました。ただ、地面は暗くてよく見えませんな。

．．．．．もしかすると、また新しいループに当たってしまったのですかな？
視界にステータス魔法が出ているか確認します。

．．．．．反応がありません。

俺は仕方なく、長針の止まった時計を後にして辺りを探索し始めます。

斜面を、一歩ずつ踏み出して。

．．．．．どれくらい歩いたのでしようか。

恐らく、30分くらい歩いたと思いますぞ。

丘の、大きな岩の上で全身をロープに羽織った奴と出会いました。辺りには、蛍のよう
うな光が集まっています。

．．．．．精霊、ですか。それも、沢山。

慎重は、俺と比べると随分と小さく、お義父さんの腰辺りにくるであろう身長です。

少し横幅もあり．．．羽でしょうか。

フィロリアルとは違う。

「やつと来た……上から見えていたよ」

ローブを羽織った奴は、俺に話し掛けて来ました。

見えていたのですかな。少なくとも随分と暗い道でしたが。それこそ、スキルが使えない今は星の灯りを辿らないといけなくらいには。

……一応、警戒しておきましょう。

「時計が壊れてしまったのですが、お前、直す事は出来ますかな？」

「え？いや、いきなり何言ってるの？」

胡散臭い奴ですなー。

ローブに身を隠している所が……あ。

俺もでしたな、そう言えば。クエー！ですぞ！

「それよりも、君は何処へ行こうとしていたのか、教えてくれると力になれると思うよ？」

「過去ですぞ。で、直せますかな？」

「か、過去？……槍の勇者？」

「愛の狩人ですぞ！で、直せますかな？」

「愛の狩人……？槍の勇者じゃなくて……？」

なんでこいつ俺が槍の勇者だと知っているのですかな？

そう思い考えていると、槍から精霊が飛んで、ロープの周りを旋回し始めました。

「槍、お前が教えたのですかな？」

「それと、直す事は出来るけど……取り合えず、ボクの話聞いてくれない？君に、色々話したい事が……」

成る程、コイツ結構有能ですな。

仕方がないので、少しだけ話を聞いてみましょう。

槍の勇者と平行世界

「まずは自己紹介から」

ローブを羽織った奴：：もうローブといいましようか。ローブはオホンっと一度空気を正すように咳をしたかと思うと、改めて話始めました。

「ボクは君が戦った相手を殺す為に世界をを渡り歩く存在、神狩りって言う方があつてる：：のかな？」

：：：：はあ？ですぞ。

そんな都合の良い存在が居るのですかな？

ありえない、ですぞ。

「信じてないね」

「当たり前ですぞー、そんなチート持ちの奴がいるならどうしてお義父さんを救わな

かったのですかな？」

チート、と言うと、俺も充分にチートですが。

それでも奴には敵わなかったのですぞ。

…… そんな奴が、何故尚文くんを救わなかった？

怒りが、ふつつつと込み上げてくる。

「あのね……この空を見てくれない？」

ローブが俺の感情を察したかのように呟いた。

俺は、そう告げられて空を眺めます。

空には沢山浮かぶ星。

…… 星が、どうかしたのですかな？

「ここは次元の狭間。空に浮かんでいるのは、一つ一つか独立した世界なんだ」

ローブがそう答えます。

よく目を、お義父さんに向けるように凝らしてみるとそれらは星ではありませんでしたぞ。

水晶玉、でしょうか。本当に星ではありませんでしたぞ。良く眺めていると、思いのほかに近く見えます。

椅子とかで手を伸ばすと届きそうですな。

「どんな世界でも辿り着ける次元の狭間。見た感じは魔法の無い世界から来たっぽいから、分かりやすく言う宇宙かな？それに近い場所。ルールなんてない世界。普通の人間じゃ迷子になること請け合いですよ」

選択肢はありますかな。

お義父さんはギャルゲーの世界のようだと呟いておりましたぞ。お義父さんは何ら代わりない普通の日本、らしいですが。

こんなに世界が浮かんでいると、何が普通でどれが異常なのか分からなくなってきましたぞ。

「まあ、どうやら君は普通の人間では無さそうだけど」

ロープが意味深に呟きました。

自覚はありますが、他人に言われると……なんだか。

「で、ボクはひと通り話したけど、君の事も話して欲しいな。じやないと君の疑問にも答えようがない」

敵意が存在しない事はあきらまかですな。

油断はしませんが、ループの事が聞けるかもしれませんが。仕方ないですぞ。

「むう……そうですな……」

少し間を置いてから話ますぞ。

「俺の名前は北村元康。お義父さんからはギャルゲーのような世界だと言われた社会の愛の狩人でありますぞ」

「愛の狩人……？ま、まあギャルゲーって言うのはよく分からないけど……君が来た社

会ってどれくらいの文明？」

どれくらいの文明かですか？

国によって大きく技術力の差はありますし、どれくらいと呼ばれても良く分かりませんで。

「……？」

「わからない？これただけ様々な世界があるって事は、君の世界に繋げようとしても繋がられないんだよ。ロボットが有る世界があれば、魔法の存在する世界もある。だからどれくらいかの基準が欲しい」

唾然と当たり前の事のように重要な事が呟かれ黙り混む事しか出来ませんでした。

いったい俺の世界ってどれくらいなのでしょう。

比較対象が少ないので悩みますぞ。

「そうだなー……傾向と対策だけでも良いから聞くね、年表いくつ？AI搭載型の自立起動ロボットは居た？情報伝達能力はどの程度？」

「年表は――」

情報伝達能力などは分かりませんが、確か自立起動ロボットは居たと思いませんぞ。砂漠の奴ですな。あれは良い思い出ですぞー。

「……なるほど、ね。ちょこちょこ情報が一致していないのは、君が平行世界に飛んでいたからなのかな。ほら、槍の名前が変わってたりするでしょ？」

ああ、確かに。

あの約束をしてから、槍の名前が変化しましたな。

〃 ー真・龍刻の長針 0 / 300 LR

能力解放済み……・装備ボーナス、能力『時間遡行』『選択遡行』『ランダム遡行』

専用効果 平行分岐する世界〃

こんな能力と名前だったと思いますぞ。

よく分からなかったので放置していましたが。

「そう、それ。その能力で君、槍の勇者は平行世界を繋いで世界を存続させようとしていた。：らしいんだけど」

「らしい……？」

焦らしてきますなこのローブ……

早く話せ！ですぞ。

「そう、らしい。実は全ての世界はいわば夢のような世界で、ただの幻想だった……って話みたいだよ？」

槌の勇者

……成る程、その話でしたか。

とつくの昔にお姉さんに教わった事ですな。

そして、俺が世界を存続させる事を望んだ瞬間でもあった。そんな、残酷な真実でした。

「知っていますぞ、お姉さんに教わりましたからな」

「え、ええ……」

そんなに落胆させるような事でしたでしょうか。

別に、俺は過去を消したことを後悔はしておりませんぞ。そのおかげで新たなお義父さんと出会えたのですからな……。フイー口たんに会えないのは寂しいですが。

それも、もうある程度諦めた事ですから。

あの時以降、覚悟は決めておりましたぞ……。

「君がどんな人と関わってきたのかは分からないけど……本当はボクと何度か出会ってるんじゃない？」

むむ……記憶の彼方にも無いですな。

「出会ってないですな」

「冗談だよ……でも、お姉さんって人は気になるね……ひとつとして、ボクと同じ神狩りだったりにして」

お姉さんはお姉さんですぞ！

……と云いたい所ですが、流石にここでふざけるのは止めておきましょうか。

「お姉さんは、槌の勇者に選ばれていましたな」

「槌の勇者……成る程、そう言う事だったのか……」

「ん？何か言いましたかな？」

「い、いや、なんでも無いよ……君が知らなくても大丈夫そんな内容だしね……」

ロープは強引に話を打ち切った後、アナログ時計の方向へと足を進めました。俺はそんなロープの変化を疑問に思いながら、ゆっくりと坂を下ります。

「うーん、壊れていると言うよりは、元に戻る時間軸が存在していない、元のある時空からズレたせいで戻れなくなった、のかな……？」

ガチャガチャとロープはアナログ時計を触りながら答えます。ロープの奴、時空が分かるのでしょうか……。流石の俺にも良く分からないですぞ。

いつか、文明は時を解析するまでに至るのでしょうか……。？そういった存在が女神だとロープは言っていました。ある意味で、完全体なのかもしれないな。

「槍の精霊、ここを手伝って貰えるかな？」

ロープはそういい、暫くの間時計と格闘していました。時折精霊が手伝っているのも印象に残りました。

暫くして。

淡い光が灯り、ロープが漸く手を時計から離しました。精霊が嬉しそうにロープの周りを周回しますぞ。

「うん、これで繋がれた。でも、さつき言った通り元々在るべき時空は存在していなかったから、槍の精霊の力を借りてズレが生じた時間軸に時計を繋がれたけど……。きっと大丈夫……なはず」

ズレが生じた？ いったい、何故でしょうか。

今までズレが生じようとも元の時間に戻れたはず。

「本来なら道を歩かないといけないんだけど、精霊が力を貸してくれているからね、ちゃんと着けると思うよ」

なんで二度言ったのですかな？

「最後に……ボクの名前はアーク。色々あるけど、これが一番短い名前。相手にだけ名乗らせておいて、こっちが名乗らないのは失礼だと思ったからね……」

アーク……ですか。

正直、アークでもローブでもどちらでも良いのですが。
似た綴りではありませんな。

「では、槌の勇者北村元康……どうか、御武運を」

最後にアークがそう呟いて、時は再び動き出しました。

どうやら、色々と槌のループ条件が変化しているようですね……。

ですが、この元康がループに関わっている事は事実なので、どのような事であろうと、より良い未来を手繰り寄せてみますぞ。